

平成21年度科学研究費補助金に1件採択

ネパールの森林保全における家畜糞尿を用いたバイオガス導入の効果に関する実証研究(2009-2011)

多くの開発途上国における森林減少の一大要因は、日々の煮炊きに用いる薪炭材です。家畜糞尿を用いたバイオガスは、薪炭材利用量の削減と、資源の有効活用による森林保全活動の一環として、NGOや国際機関の支援を通じて多くの開発途上国で導入が進められています。しかし、バイオガスの導入による影響は、薪炭材利用量の削減に効果があるという点以外は明確になっておらず、特に森林資源全体やその管理主体である地域住民の生計活動、森林管理体制、地域社会などに対する影響が明確にされていません。この研究では、バイオガスの導入から20年近く経過しているネパールの丘陵地において、バイオガスの導入が薪炭材利用量だけでなく、森林植生、地域住民の生計活動、森林管理体制などに与えている影響について、定量的・定性的な実態調査に基づいた分析を行い、バイオガスの導入に関する正負のインパクトや課題を明らかにします。(伊藤香純)



森林が荒廃したネパールの丘陵地

平成21年度文部科学省「国際協カイニシアティブ」教育協力拠点形成事業に2件 昨年に引き続き採択

農学知的支援ネットワークによる科学技術協力モデルの構築

昨年取りかかった農学知的支援ネットワークを今年度正式に立ち上げる予定です。文部科学省、国際協力機構等の協力を得て、大学支援や科学技術協力予算の獲得にも取り組み、ネットワークを活かした活動の実用性を示したいと考えています。そのため、全国から9名の準備委員と文部科学省、農林水産省、国際協力機構および国際農林水産業研究センターからアドバイザーをお願いして準備を進めています。また、昨年度実施したリソース・ニーズ調査結果を基に、今年度は国内外の共同研究提案に向けた可能性調査を実施し、国内研修を含む科学技術協力プロジェクトの具体案作成に取り組みます。さらに、大学による科学技術協力の先行事例を集め、大学が戦略的に科学技術協力を実施するための方策を検証し、ネットワーク関係者と広く共有したいと考えています。(浅沼修一)

開発途上国における拠点大学を中心とした農産物加工産業振興モデルの構築とその普及

この事業目的は、カンボジアの農業分野の基幹大学である王立農業大学(RUA)に、農家の実情や現場での実践に基づいた研究・教育体制を構築することを支援し、大学による農産物加工品振興/一村一品の開発モデルとしてカンボジア国内および近隣諸国に普及することです。平成20年度、ICCAEはタケオ州の一協力農家を選び、派遣酒造専門家の指導のもとで、RUAの教員と一緒に従来の醗酵法と蒸留法の改良に取り組みました。日本の技術を直接持ち込むのではなく、現地の伝統的な醗酵と蒸留の改善により試作した蒸留酒は、匂い、味、外見とも大変好評でした。また、現地調査を通してRUA学生への実習機会、現地研修を通してRUA・名古屋大学農学部両学生への教育機会を提供しました。本年は、さらに品質の向上を目指すとともに、商品化に向けた生産農家のグループ化、品質管理、販路開発のための生産量確保を目指します。(松本哲男)



第3回カンボジア州一品展示会にて改良酒の商業大臣への説明